

霊的な発達（成長）

サマリアの女（ヨハ 4, 1-30 ; 39-42）

4, 1-6 導入



サマリアは北の王国、イスラエルの首都であったが、アッシリア王サルゴン 2 世の攻撃により紀元前 721 年に陥落。住民は捕囚の民となり指導的地位にあった高位者は強制移民により他の土地に移され[1]、サマリアにはアッシリアからの移民が移り住んだ。このときイスラエル王国の故地に残ったイスラエル人と、移民との間に生まれた人々がサマリア人と呼ばれた。

彼等はユダヤ人にイスラエル人の血を穢した者といわれ迫害を受けていた。また、捕囚から帰った後、アッシリアの宗教とユダヤ教が混同したものを信じ、ユダヤ教に対抗して特別な教派を形成していたため、ユダヤ人はサマリア人を正統信仰から外れた者達とみなし、交わりを嫌っていた。実際、サマリア人はヘレニズム時代、ナーブルスのサマリア神殿にギリシアの神の像を持ち込んだこともあった。また、ユダヤ人によって聖地エルサレムから閉め出されていたため、ゲリジム山に神殿を建てていた。

📖 「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」ヨハ 7:37

📖 「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」ヨハ 17:3

- 井戸は、賜物の象徴です。
- イエス・キリストは父である神が全人類のために与えてくださった賜物です。
- イエス・キリストはすべての人類の渇きをいやす「生ける水」です。
- 聖書において「誰かを知る」とは、この人と繋がるということです。

「**神を知ること**」、それは、神が人間の心に向けて発した最初の呼びかけである。聖書は、このことが思弁ではなく生活全体を通して把握されてゆくさまを示す。セム人にとっては、“知る” (h:yada’) とは、単なる抽象的な知識以上のことであり、対象との実存的関係を表わすものだからである。彼らによると、なにかを知るとは、それについて具体的な体験をすることを意味する。たとえば、苦しみ(イザ 53:3)・罪(知 3:13)・戦争(士 3:1)・平和(イザ 59:8)・善悪(創 2:9 創 2:17)などは、実際にこれとかかわりをもって深い影響を心に受けつつ、知られてゆく。また、だれかを知るとは、その人と人格的な関係にはいることである。それゆえ、この関係にはさまざまなかたちがあり、その程度も千差万別である。したがって“知る”という語は、きわめて多様に解される。たとえばまず、人間関係では、家族の連帯性(申 33:9)とか夫婦の関係(創 4:1 ルカ 1:34)を表わすためにも用いられ、次に神に対しても使用される。“神を知る”という表現は、神の裁きによって災いにあうとき(エゼ 12:15)、神と契約関係にはいるとき(エレ 31:34)、あるいは少しづつ神との親しい関係にはいるときなどにみられ、神認識の程度はそれぞれ異なっている。」(聖書思想辞典より)

4, 7-15 人間のための神の賜物

- 📖 「この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。」ヨハ 19:28
- 📖 「わたしが喜ぶのは／愛であっていけにえではなく／神を知ることであって／焼き尽くす献げ物ではない。」ホセ6:6 (マタ 9:13;12,7)
- 📖 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。あなたはいかなる像も造つてはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造つてはならない。あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。」出 20:2-5
- 📖 「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」マタ 10:37

- キリストの渴きは、父である神の渴きを表しています。
- 神は、人間の愛を求めておられます。「人間の愛に渴いておられる」
- 自分の罪深さを自覚している人や自分の価値を否定している（自尊心を持たない）人は、自分に対する神の望み（神が自分の愛を求めておられること）を知らされて驚くはずです。

📖 「これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。」ルカ 5:8

「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」ヨハ 4:9

↓

「聖なる神であるあなたが、惨めな人間であるわたしに、どうして愛してくださいと頼むのですか。」

- サマリアの女が罪を犯していたのは、悪意のためではなく、自分の心の本当の望みとその望みを満たす方法（可能性）を知らなかったからです。（自分の渴きをいやすだろうと思ったものを手に入れることによって、しばらくの間、自分の渴きがいやされたような気持になっても、再び渴くようになったにもかかわらず、他の可能性を知らなかったので、同じものを求め続けました。）
- イエスが教えてくださった通りに、人間の渴きを完全にいやすことのできるのは、真の愛だけなのです。父である神がその愛の源なのです。

📖 「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている「霊」について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、「霊」がまだ降っていなかったからである。」ヨハ 7:37-39

- ◇ 人間はイエスに自分の渴きをいやしていただいて（神の愛を受けて）から、
- ◇ 神の渴きをいやす（愛をもって神の愛に応える）ように努めるならば、
- ◇ 自分の罪から清められ（神と正しい関係に生きるようになり）、
- ◇ 他の人の渴きをいやす（神の愛と神の命を伝える）ことができるようになります。

- イエスの言葉を聞いて（その意味を理解することがあまりできなくても）サマリアの女は、新しい希望を抱いて、今まで求めたことのなかったもの（生ける水）を求めようになりました。それは、新しい望みであったのではなく、今まで見出さなかった自分の心の真の望みでした。

4, 16-30 生ける水を受け入れる方法（道）

📖 「まことに、わが民は二つの悪を行った。生ける水の源であるわたしを捨てて／無用の水溜めを掘った。水をためることのできない／こわれた水溜めを。」 エレ 2:13

📖 「なぜ、糧にならぬもののために銀を量って払い／飢えを満たさぬもののために労するのか。わたしに聞き従えば／良いものを食べることができる。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう。」 イザ 55:2

「神を知らずに、自分のことを知った人は、絶望に落ちます。
自分を知らずに、神のことを知った人は、傲慢になってしまいます。」

ブレーズ・パスカル (Blaise Pascal)

- ◆ 「生ける水」を受け入れるために、自分の罪（今まで、間違った方法によって心の望みを満たそうとしたこと）や自分の限界（自分の力だけでは、自分の心の望みを満たすことができないということ）を認めて、神のいつくしみ深い愛を頼りにして、心を開くことが必要なのです。
- ◆ 偶像礼拝とは、神以外のものを、自分の幸福の絶対的な条件として（幸せになるためにどうしても必要であると）考え、頼りにする（神よりも大事にする）ことなのです。
- ◆ 「霊をもって礼拝する」とは、信仰と愛によって神と結ばれて、愛の交わりに生きることです。
- ◆ 「真理をもって礼拝する」とは、神と心をついに一つにして、神の望みに従って生きること、つまり愛を実践するということです。
- ◆ 「女は水がめをそこに置いたまま町に行き」人々にイエスについて話したのは、彼女の回心（頼りにしていたものがもはや必要なくなった）と癒し（他人に対する恐れから解放されて、他人を生かすようになったこと）を表す表現です。
- ◆ サマリアの女は回心することや頂いた恵みを他の人に伝えるようになったことによって、「水を飲ませてください」というイエスの最初の願いに応じて、愛を求めているイエスの「渇き」をいやしたのです。

4, 39-42 サマリアの証によってサマリア人が、イエスを信じる